

「文明と経営・生命と象徴から学問と倫理へ」
——浦井憲先生の整理を受けて、改めて考えること(1)——

村田晴夫

5月6日の研究会とその後に行われたメールによるディスカッションが活発に展開されました。浦井先生が5月31日にその整理をしてくださいました。以下、その整理に基づいて、私見を書きたいと思います。

その5月31日の整理は

1. セミナーでの討論より
2. セミナー後当初のやりとり
3. 守永先生「生命と象徴」に向けて
4. 村田先生の守永先生に向けられた応答
ならびに当方のコメント「一般理論」についてのご質問

の4項に分類されている。

それぞれに重要な論点が含まれているのであるが、
先ず 1.「セミナーでの討論より」に関連して、「具体性置き違いの誤謬」について確認しておきたい。

ここで議論されたことはさらに次の3種に分けられる：

- ①具体性の問題、②主体性と生成、③関係性

注：この文章を書いてしばらく時間が経過してしまったのだが、その間に、浦井先生を通して、当日の塩谷さんの「具体性置き違い」に関する議論の起こしが送られて来た。misplaced concretenessを率直に解釈して、具体性の置かれる場所の間違い、という観点に着目しての論を提起しておられるのである。当日も議論があったが、場所、あるいは場、に関する取り違いという観点からの問題提起をされている。これは興味深い論題である。それに関しては改めて書くこととして、ホワイトヘッドが「具体性置き違いの誤謬」としたものは何であったかということを押さえておくことも、これからの議論にとって必要なことだろうと思う。それについて簡潔にまとめてみたので、もとの文章を生かして示しておこうと思う。

①具体性置き違いの問題

予め、私の主張を書き留めておきたい：

具体性置き違いを批判することは哲学に課された役割である。

しかし、具体性を明示的に立てることはできない。具体性を示そうとする必要は必要であるし、大切なことではあるが、それを言語によって示したとき、そこに示されたものが具体性そのものであるという保証はない。

ホワイトヘッドに依れば、近代科学の基本前提は17世紀以来、次の2点である：

a) 世界は物質から成るといふ科学的唯物論。物質は精神から切り離されて、無感覚、無価値、無目的なものであるとされる。

そして

b) 宇宙における物質の配置は、空間と時間において「単に位置を占める simple location」ことと捉えられる。

このような抽象化された思考によって、近代科学は多くの知見を産み出した。

抽象化と推論によって一般法則を見出し、その成果を人間の文明に生かすこと。これが近代科学技術の基盤であり、近代文明の基礎となっているのである。

問題は、このような抽象化された前提に立つ近代科学の成果を、そのまま現実の具体性であると思いつくこと、にある。

これがホワイトヘッドの言う「具体性置き違いの誤謬」である。

何が置き違えられているのであろうか。抽象化自体に誤謬はない。抽象化された前提に立って得られる理論を、そのまますべてが具体性のものだと信ずることに誤謬が潜む、ということである。

また、「単に位置を占める」という前提は、関係性の無視あるいはその脱落ということでもあろう。この点は後述されるであろう。

ホワイトヘッドはこれら a) と b) に対して、その有機体の哲学でもって答えたのである。また次節に示すように、西田幾多郎の哲学にもこれら a) と b) に対抗する思想がある。

強調しておきたいことは、第一に、抽象化自体は批判されるものではないこと、第二に、何が具体性であるかという問題には、正面から答えることができないのであって、その都度、批判を乗り越えて、これが具体性だと確信するものを打ち出すことができるだけなのだという事である。このところは、浦井先生の学問論にも共通するところではないだろうか。

以上に要約したように、近代科学の立脚する前提に具体性置き違いの誤謬があることを批判することはできる。そしてその批判点を克服するような形而上学的思想を出すこともできる。しかしながら、そこに構築される「学問」がどこまで具体性に立脚したものであるかについては判断できない。

その「学問」が現実の文明と関わる領域において、その具体性の問題を批判するのが哲学の役割である。

②主体性と生成

主体性と客体性は、固定されたものではない。主体性あって認識があり、決断があり、行動がある、という見方は、例えばカントに見られるような、西欧近代のものである。

それに対して、20世紀の思想には、ホワイトヘッドや西田幾多郎のような、主体性はその生成と客体性の過程的・弁証法的な移り行きにおいて有るのだという思想が現れた。

主体性の問題は、上述の「具体性置き違い」の問題とセットになっているというのが私の考え方である。

西田幾多郎は行為的直観という表現で、またそれと弁証法的に連動する歴史的世界という考え方に立って、そのいわゆる西田哲学全体において、純粹経験から場所の論理まで、そのエッセンスを通して、この問題に迫っている。「現実の世界とは物と物との相働く世界でなければならない」「現実の世界は何処までも多の一でなければならない。個物と個物との相互限定の世界でなければならない。故に私は現実の世界は絶対矛盾的自己同一というのである」(西田幾多郎「絶対矛盾的自己同一」岩波文庫版『哲学論集III』所収、冒頭)

③関係性

浦井先生が強調されることのひとつに関係性がある。

既に述べたように、具体性置き違いの誤謬ということの根底には、関係性が無視されていることがある。関係性の無視、そして粒子性の物質が「単に位置を占める」こと、これがその具体性置き違いの本質をなす。

関係性は、上述してきた「単に位置を占める simple location」に対抗する考え方である。

関係性という用語から受けるイメージは、どちらかと言えば静的な空間のイメージであるが、浦井先生はそのまとめの中で、三井先生のお考えに関する叙述に関連して、明確に、「プロセスあるいは関係性」と表現しておられることに現れているように、動的な性格も持たせた内容・含意での「関係性」を示されている。

西田であれば弁証法と「歴史的世界」がこれを代表するであろう。またホワイトヘッドでは「過程 process」である。それらに含意された意味内容を、より一般化された「関係性」の理論が強調されて、壮大な肉付けを期待されるものとして留まっているように見えるのであるが、いかがであろうか。

そしてこれとも関連するのであるが、浦井先生は学問するものの、学問に対する関係性、立ち位置、学の普遍性、という問題に進まれる。

そこには学問の自由という問題が出てくることにもなる。

これはこれで非常に大きな問題ではあるが、ここには一種の相対性があるのではないだろうか。どこまで行っても、絶対と言える学問はあり得ないということではないだろうか。

科学として語ること、これはこれからの歴史においても否定されない。それと同時に、哲学として語ること、これがこれからはより重要な学的営為と期待されるのだと、私には思われる。